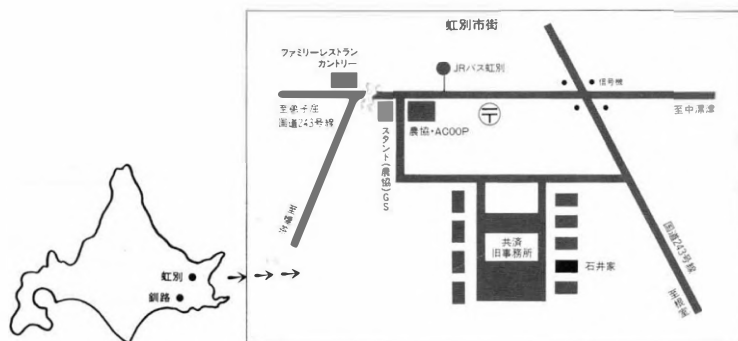
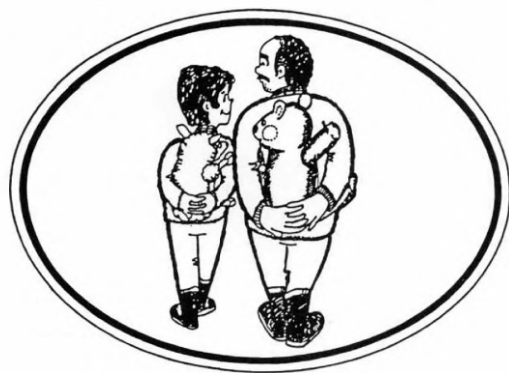




|   |                                                                                  |      |   |
|---|----------------------------------------------------------------------------------|------|---|
| 熊 | が                                                                                | かわうそ | を |
| 連 | れ                                                                                | て    | き |
| た | <p>北の、おつきてあったかいクマと、南の、ちいちゃいけど知恵がある愛嬌者のカワウソが恋をしました。これは、その出逢いから結婚までのころあたたまる物語。</p> |      |   |



KUMA MEETS KAWAUSO.

## 頭隠して顔隠さず——道東のゴルバチョフ氏アラブ風変装の弁

### Change 変身

北海道〇市の某シティホテルの一室から出て来たカップル。かねてから噂になりながら交際を否定し続けた二人であります。

男のほうは一見年令不詳、本誌の調べによると一九五七年生まれというから意外に若く、出生地については色々な説があるものの、関東の、一票がいくつ取引される金権政治のC県出身とも、ソ連のウクライナ地方とも言われる謎の人物。その容貌から「道東のゴルバチョフ」ともいわれる怪人であります。

女のほうは、「道東のゴルバチョフ」を影で操る黒幕として知る人ぞ知る噂の女性。その二人がホテルの部屋から出て来たところを偶然捕らえたのが下の写真です。

その後の二人の慌てようといった写真を取っておきながらいうのも恐縮ですが、ほとんど狼狽といったものでした。カラー写真でないのが残念ですが、このときは二人とも顔色が真っ青。慌てて元いた部屋に引きこもり、ドアに鍵をかけ何やら密談の気配。部屋に入ってから二人の会話を立ち聞きすると

男「いやいやいや、写真なんか取られてまずいべサ」

女「そりゃ、ナマらずいんでないかい。」



男「ナシタラいいしょ。」

女「このまもう一回出てつたらまた写真とられるべね。」

男「やつば、取られるんでないかい。」

女「あのカメラマンひつこそうな感じだったモンネ。なんかいい方法ないべか。」

男「変装していくなんてのはどうだべか。」

女「いやいやいや、そりゃいいんでないかい。写真取られても僕らだと解らなければいいんだもんね。」

という会話が続いた後、なにやらゴッゴソと着替えているような物音がしてひらいたドアから出て来たのが左写真の二人でした。

啞然！とするカメラマンの横を堂々と通り抜けるゴルバチョフ氏。頭はガラビエでかくしてはいるものの、今度は手で顔を隠そうともせず、どう見てもさつき慌てて部屋に逃げ込んだままのおふたりでありました。

通り過ぎざまに何やら変装(?)のかいあってゴルバチョフ氏改めアラファト氏、アラビア語ともロシア語とも解らぬ意味不明のことをまくし立てて行きました、良く聞くと少々ガラの悪い日本語で、「バアーロー、ヘンソウデアレガダレダカワカラナクナッタダローガ。ザミミサラセ、アホンダラーガ。」

こんな変装じゃあ、こまかされないよねエ。

Photo 平田稔夫



# DateのData

## 1 亮一・正子運命の出会い

(86.7.12)

北海道旅行中の正子、同僚中野民夫の紹介で標茶町在住、亮一に会う。

## 2 亮一神戸ポートアイランド

(8.24~25)

亮一、九州研修旅行の途中大阪に立ち寄る。神戸ポートアイランドでデート。亮一「結婚しましょう。」正子「…(何考えてるんだろうコイツ)」

## 3 亮一河添家初訪問

(10.9~12)

夜、河添家訪問。正子父武士の第一声「こりゃ聞きしにまさるハゲ親爺やナァ」亮一「エヘヘ」と笑いながら「ウーン、これは手ごわい。」長兄正雄、和子に会う。

## 4 亮一再訪。

(12.5~7)

生駒山頂にてアイススケート。正子転倒の際に肩を痛める。未だに右肩がおかしいとか…。

## 5 亮一正月帰省にて

(87.1.2~4)

中野家の新年会。その後、正子発熱。代わりに次兄正巳と会う。

## 6 正子道東の真冬を体験

(2.11~15)

亮一の高校先輩の麻生先生邸に泊。途中から兄正巳合流。ダイヤモンドダストを見て正子感激する。

## 7 亮一友人結婚式のついでに

(2.27~3.1)

亮一の高校の友人、岡崎嘉樹結婚式に参加(名古屋)。

## 8 正子黄金週間に道東

(5.2~5)

知床、宮島岬など。

## 9 高知へ

(6.12~15)

亮一、札幌出張のついでに(?)高知に足を伸ばす。獣医学部同級生K、浜田、道案内。

## 10 正子研修で東京

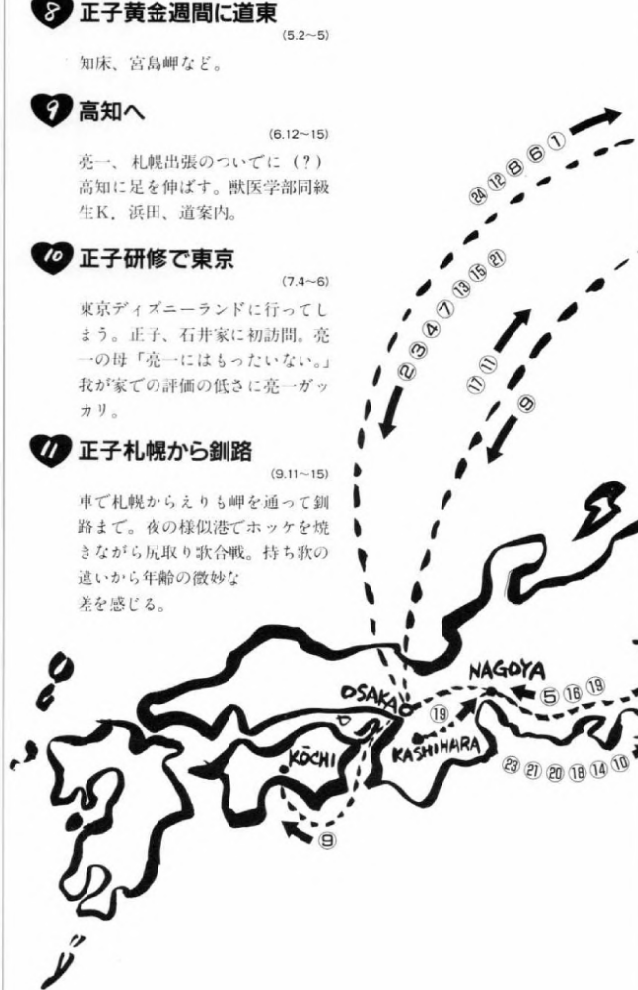
(7.4~6)

東京ディズニーランドに行ってしまう。正子、石井家に初訪問。亮一の母「亮一にはもったいない。」我が家での評価の低さに亮一ガッカリ。

## 11 正子札幌から釧路

(9.11~15)

車で札幌からえりも岬を通って釧路まで。夜の様似港でホッケを焼きながら尻取り歌合戦。持ち歌の違いから年齢の微妙な差を感じる。



## 12 亮一肺炎で入院。正子駆け付ける。

(9.27~28)

正子、亮一の顔を見るまで心配で食欲なし。入院中の亮一、食欲旺盛。

## 13 亮一関西へ

(11.6~9)

東京転勤の中野民夫の送別会。正子、今津龍夫・朋子(亮一の姉)に会う。

## 14 亮一、友人結婚式で東京

(12.5~7)

獣医学部同級生、岡崎克則結婚式に出席。2次会から正子参加。

## 15 亮一河添ご両親に結婚の話

(12.29~31)

その後、嵐あげをした。日も暮れるころようやくあがった。

## 16 両家両親と初会合

(88.1.4)

大阪にて中華料理を食べながら。「よろしく」「こちらこそ」

## 17 正子、道央に

(2.10~14)

洞爺湖など。

## 18 亮一出張で東京

(4.2)

正子、風邪気味でダウン寸前。

## 19 名古屋で再会

(4.5)

東京一奈良の中間で会う。正子、その後寝込む。

## 20 河添ご両親、石井宅に

(4.29~5.2)

両親を交えて結婚について正式に話し合う。結婚に向けて大きく前進。春の江戸川の風がこちよかった。

## 21 婚約

(6.16~18)

この結婚の立会人である中野民夫・陽子夫妻と日比谷の「南部亭」で昼食をしながら指輪と時計を交換する。これを世間一般でいう結納とした。

## 22 亮一樺原へ

(8.19~21)

大阪市立美術館「東京藝術大学所蔵名作展」へ。亮一、白龍幾之助作「椿古」のモデルの一人である曾祖母とご対面。

## 23 亮一祖父捨吉の通夜と葬儀

(9.19~20)

9.18に亡くなった祖父の通夜と葬儀に母敏子とともに正子市川に。

## 24 最終チェック

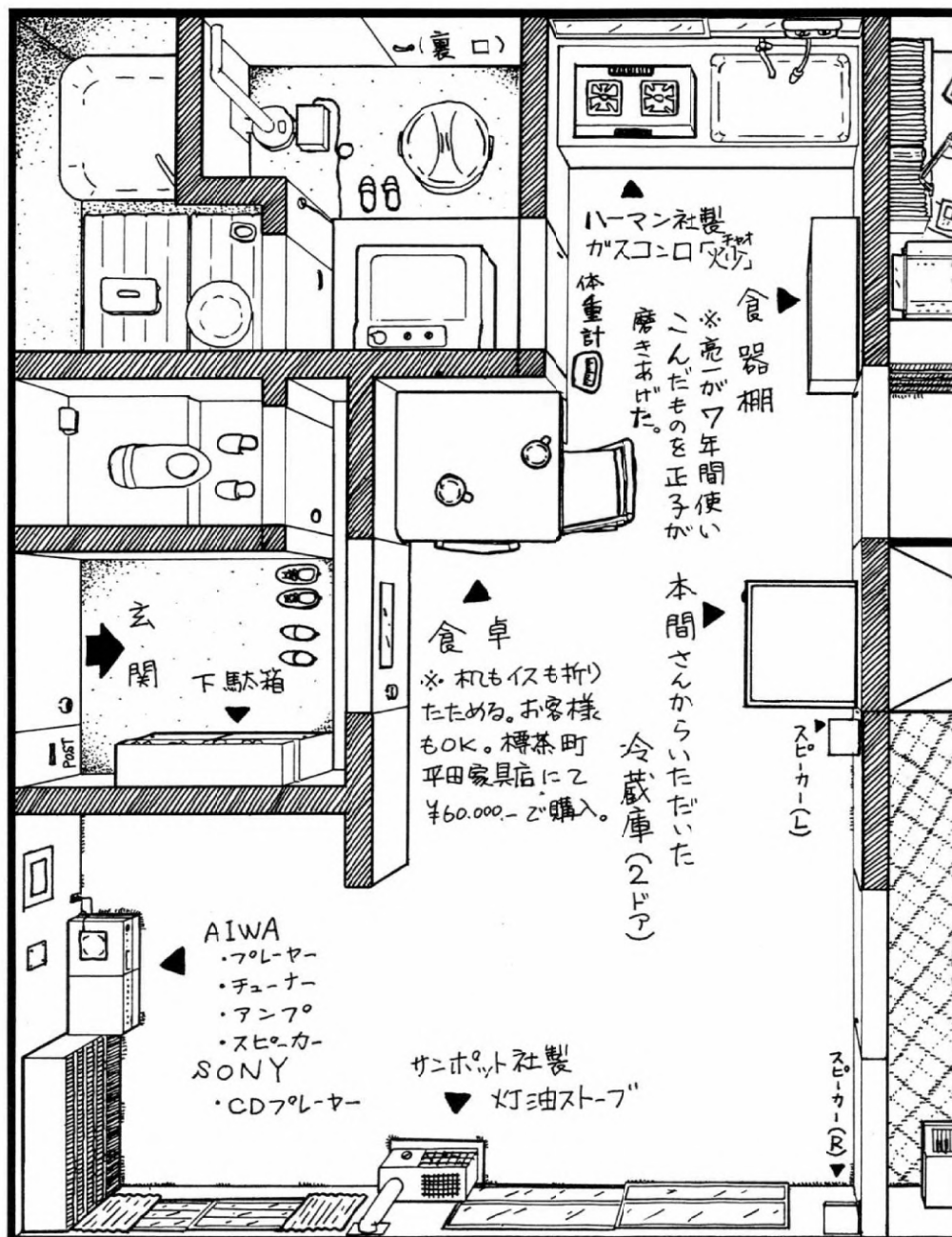
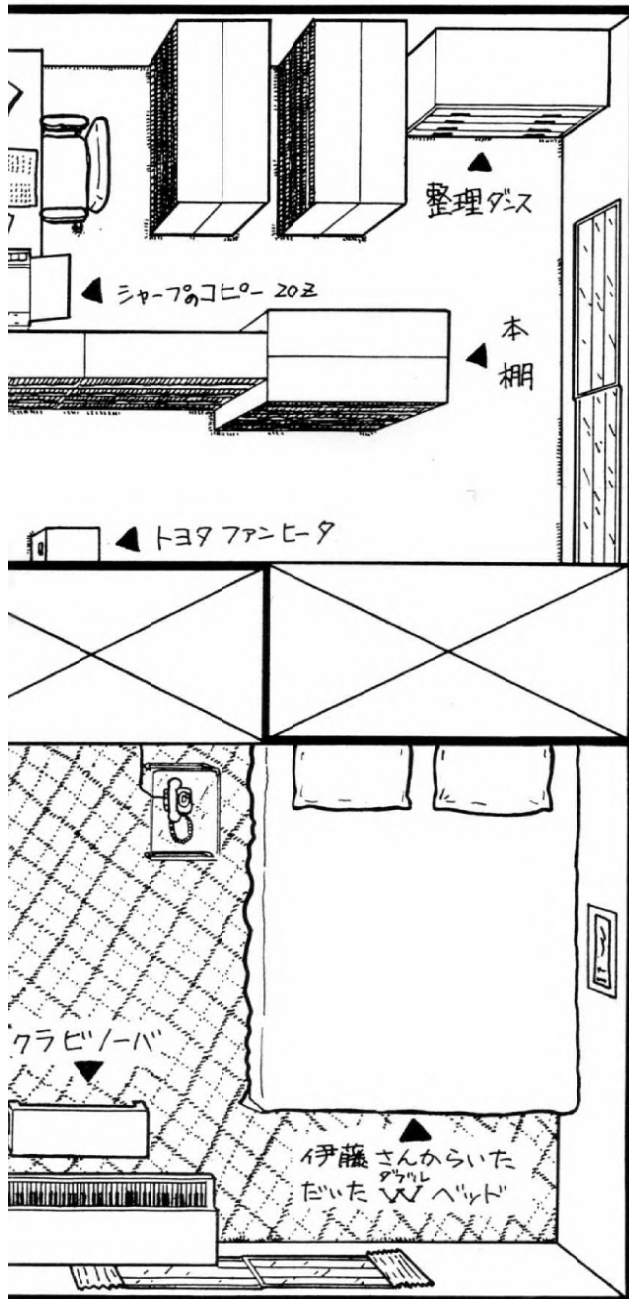
(10.1~10)

虹別の亮一宅にて合宿。正子、もしかしたら男を誤ったのではないかと胸に手を当て考える。まあ、やってみるか、との結論。

# 正子が覗いた新居

88年10月現在の石井亮一宅を一点透視法で描いたもの。この時点では正子の荷物はまだ何も無い状態であるといえる。すみからすみまで散乱するゴミのたぐいは全くなさく、すっきりと、意外にシンプルなお家であることがわかる。築約20年。亮一の職場までは徒歩一分。商店・学校・官公庁などすべて徒歩五分以内。ガス・水道・暖房完備。全面二重窓。

心におりながら大自然にかこまれ、それでいて、家賃今更き千円。ボキリという、ありがたいありかたの共済住宅。居心地のよい家にするべくかんばりますから、ぜひぜひ遊びに来てください。そのうち改訂版を描きたいと思つてます。お楽しみに。(ゴミに埋もれて更迭の把握が困難なため、やむにやまれぬレイアウト変更が若干ございます。)



## 対談・愛のサバイバル・ゲーム

亮一 まずはこのドラマのはじまりである1986年7月12日の弟子屈駅のことから。

正子 私の26才の誕生日の次の日でした。

亮一 僕の麻布高校時代以来の親友である中野民夫の博報堂大阪支社の同僚である河添正子から北海道旅行に行くのでその途中で会いたいのだけれど、と電話があった。

正子 中野さんには前から噂はきいていました。

亮一 何て言っていた？

正子 とにかく、これと（と手を額から頭のうえに上げるポーズ）これで（腹の前で太鼓を描くポーズ）何か凄い奴なんだけど（笑）いい奴であると。

亮一 後の「いい奴」って方を強調して下さい。それで第一印象は？

正子 やっぱこれとこれで（笑）。北海道の獣医さんということで、もうちょっと素朴な人ではないかと想像していた。

亮一 そりゃ都会近郊育ちのすれっからしだもの、素朴って感じとは違うだろうな。

正子 私の第一印象は？

亮一 大阪のどまん中のOLで、しかも広告代理店でしょ。ギンギラ、ケバケバのおネエちゃんが来るのではないかと警戒していた。

正子 て、実際は？

亮一 思ったよりも素朴な方が弟子屈に降りて来た（笑）。



正子 車で摩周湖、美幌峠を案内してもらった後で虹別のお宅に立ち寄った。

亮一 あっ、その話、止めようよ。

正子 いえ、言わせてもらいます（笑）。床にラーメンの袋や10円玉がころがっている。トイレなんか……………。

亮一 まあまあ、そのへんにして。あれでも一応は掃除したんだけどなあ。

正子 一人暮らしの男の部屋がきたないことは承知しているつもりでしたけどね。それでもピアノがおいてあるのを見て「へー」と思った。まさに「掃きだめにピアノ」（笑）。

亮一 掃きだめはひどいや。でもそんなもんか。

正子 そんなもの以上ですよ。

亮一 バイエル70番ぐらいを弾いて差し上げた。

正子 ちょうどピアノを習いたいと思っていたところだったので「へー」と思った。

亮一 そして翌、8月の終わりに再びお会いした。

正子 神戸のポート・アイランド

亮一 会って2回目にして、早くも「結婚しましょう」と口にししました。

正子 正直に言って、「この人、何考えているのだろうか」と思った。1回会っただけの何も解っていない相手に結婚を口にするなんて、私じゃあなくても誰でもいいんじゃないかと思うでしょ。

亮一 まさか？

正子 では何だったのか、ご説明願います。

亮一 7月の時に紹介者である中野と僕の関係を語るに当たり、ふたりで大学入学直後に出した同人誌のことを話した。

正子 試転創刊号「僕らがいる位置をわかってー僕はなぜ獣医か」ですね。

亮一 あれを久し振りに読み返したために、あれから10年経った現在の自分を深く内省し、30枚ぐらいの文を一気に書き上げた。

正子 試転別冊付録「10年たって試転創刊号の拙文を読む一嘆はいまどこにいるか」。

亮一 あれを書いているときは一種の興奮状態で、それもこれも河添正子が訪れて試転創刊号を再読したことが引き金になった。この人と一緒にいればおもしろいのではないかと思った。

正子 それでその思いは当たっていた？

亮一 当たっているかどうかは今後長い時間をかけて解っていくことだろうけど、少なくとも外れてはいなかったんじゃない。その証拠に今こうしてしっかりと続いている。

正子 実は、2回目に結婚のを持ち出されたときに、あきれると同時に笑ってしまった。

亮一 どうして？

正子 漠然としたイメージだけ、私は将来、田舎に住むのではないかと思っていた。だけどダンナはサラリーマンが良いと。

亮一 北海道の勤務獣医師なんてまさに条件にピッタリでしょう。

正子 本当は北海道とかの寒いところではなくて、雨の方の田舎をイメージしてはいたんだけど、まさに盲点をつかれたような気がした。私は都会には住めない人間なんです。

亮一 そして、短大時代にキャッチフレーズがありました。

正子 「サバイバル河添」（笑）。博報堂入社時の自己紹介が「都会より田舎、知性より野性、人工より天然のサバイバル人間！」

亮一 むしろ僕よりも北海道に似合っているかもしれないね。僕なんか、新宿の雑踏を歩いていると妙にイキイキしちゃうことがある。

正子 入社直後に東京のホテルに缶詰になって20日間程の研修があった時、体が土と緑を欲してきてたまらなかったことがある。都会より田舎の河添なんです。

亮一 しかし、田舎からのラブコールを送り続けたのに結婚までけっこう時間がかかったじゃない。僕としては短期決戦でいこうとしていた

んだけどね。飛行機代もかかるし（笑）。

正子 北海道と結婚するわけじゃないし。第一私は寒いのは弱いんです。

亮一 そりゃそうだった。

正子 私の場合は頭よりも体で考える方だからこの人が良いかどうか判断するまで時間がかかるんです。

亮一 時間をかけて合格したの？

正子 わりと価値観について行けると思った。

亮一 ありがとうございます。

正子 それと決定的だったのは去年秋の入院事件だったような気がする。

亮一 僕が肺炎で入院したときね。用事をキャンセルしてお見舞いに飛んで来てくれた。

正子 自分ではよく解らなかつたけどあの時初めて「もしこの人と結婚できなかつたら、それはかなり悲しいことだ」と体感した。

亮一 頭で考えたのではなく、体で感じた！

正子 そう。入院の混乱で連絡が取れず、悪い方悪い方へと想像して食欲もなくなった。

亮一 ご心配かけました。これがケガの功名といたら怒られるかなあ。さて、この対談のタイトルだけ。

正子 これからもいろんなことがおきるでしょう。負けずにふたりで頑張って生き抜いていきましょうということで……………

亮一 サバイバル 河添さんに敬意を表して「愛のサバイバル・ゲーム」なんていいね。



1957年9月9日生。9.9は奇数の「ロ」目の辰陽の節句であめでたい日である。父浩一、母節子。父は銀行員、その害に金にルズな子かできてしまった。4つ上の姉、朋子がいる。母のオッパイをたくさん食べた子であつたとか。4歳の時、家の前の真間川に落ちた溺れた死に一生を得る。父、母、姉が卒業した市川市立真間小学校に入学。1学期の級友とつとめる子であった。6年の時、市川市の陸上大会200mを13.5秒で走、2優勝。これは全国レベルの記録である。(このときの表彰式が、俺の人生の絶頂期、あとは下る一方。)父の車いすのため6年生の11月、大阪府茨木市立五橋小学校に転校。大阪教育大学付属池田中学校に入学。1時間20分かけ2通学する。インドボート部2年45分のポイントリーダーであった。このころまよひ病が重かった。ラッシャーな子の生まれ2人め2番手。テキニ3度2度有頂天になって帰ってきた日父の車いすをきく。2年生から千葉大学教育学部付属中学校に転校。バスケットボール部に入るが、インドボートの部が引けずトラバリングの反則多し。未立派市立高校に入学。ウフと笑った俺には5つおとしたカルチャーショックだった。毎日かき太極拳みたいな3年間であった。水泳部、中野民夫などVIPと出会う。倫理社会の授業(水泳教師)2はイキナリとし物理の時間は読書をするような典型的な文系科系学生だった。タモトの東大文工には後援者だった。13年生の2月、自分は何をや、2年生でいくのだからと考えるうちに突然、何の脈絡もなく俺は数回になろうと思う。この2月8日を「俺の日」と呼んでいる。この日より数回になるべく歩みしめ、両親にその旨を告げたところ猛烈に反対され、いぼらんと、真直哉の世界。出した展覧会にはみないで、11年、岡馬路予備校に通う。両親からのOKが出た。2番手、理科系の後援者準備をする。北海道大学理系入学生。1977年7月、中野民夫と結婚。2人、同姓、結婚。



# 石井亮一



1960年7月11日、山口県岩国市生まれ。父の仕事の都合で、岡山→兵庫→奈良と移り住み、最終学歴は市立岡山学園短期大学(奈良)1982年(株)博報堂大阪支社に入社。6年8ヶ月にわたる重労働。幼き頃から今日まで一貫して椅子の上より草の上を歩ける日々を送ってまいりました。好きなことは歩きまわること、(街でモンの上でも、野原でも、海辺でも)星をみること、乗り物に乗ること。苦手なのは考えること……です。

# 河添正子